日本美術院と藤井達吉

浅野　泰子

はじめに

藤井達吉は一九二一（大正一〇）年から一九二三年まで日本美術院の展覧会に日本画を出品した。筆者はこの事実に基づく展覧会を構想している。一九〇五（明治三八）年に上京した藤井が、フュウザン会をはじめとするさまざまな美術グループに加わり、ジャンル横断的な制作を行ったことは研究者や美術愛好家のよく知るところである。その中でも日本美術院は近代日本美術史への影響力が大きい。この団体とのかかわりを考えることは、藤井が画壇の大舞台に立っていたことを示すとともに、今に続く日本美術院の歴史に藤井をどのように位置づけるかを問うことにつながるだろう。展覧会は第一章で日本美術院発足時の理念を反映するメンバーの諸作を展示し、第二章では藤井をはじめ大正期の日本美術院を特徴づける作家を紹介する。そして第三章では現在も視野に入れる内容としたい。この構成は展示室面積や予算が限られる当館では難しいかもしれない。何より先行研究者による日本美術院関連の蓄積をひもとき、十分に学ばなければならない。そうでなければ筆者の構想は空想で終わってしまうだろう。そこで本稿では、平成元（一九八九）年から平成一一（一九九九）年にかけて財団法人日本美術院から発行された『日本美術院百年史』を主たる参考文献として基礎情報をまとめることにより、展覧会実現の第一歩としたい。

日本美術院の発足と初期の動向

日本美術院は岡倉天心[覚三]が創設した在野の美術研究団体である。東京美術学校（東京藝術大学美術学部の前身）校長であった天心は、中傷に満ちた怪文書をきっかけに、一八九八（明治三一）年三月、辞職に追い込まれた。その際天心に従って東京美術学校教員の職を辞した美術家たちとともに同年七月、日本美術院を発足させた。この時の正員（現在の同人）は入会順に、橋本雅邦、剱持忠四郎、西郷孤月、横山大観、寺崎広業、菱田春草、新納古拙、岡崎雪声、下村観山、小堀鞆音、山田敬中、川崎千虎、関保之助、桜井正次、尾形月耕、前田香雪、新海竹太郎、田辺源助、塩田力蔵、岡倉覚三、松本楓湖、滑川貞勝、府川一則、黒川栄勝の二六名で、各人の専門は絵画から彫刻、金

工、漆工、図案、学術まで及んでいた。役員は主幹に橋本雅邦、評議員長に岡倉覚三、評議員に橋本雅邦、岡崎雪声、劔持忠四郎、六角紫水、寺崎広業、西郷孤月、横山大観、岡部覚弥、菱田春草、幹事に劔持忠四郎、庶務嘱託に益子幹治、書記に中島潔、高木源四郎が選ばれた。[1]

日本美術院の最初の展覧会は一八九八年一〇月一五日から一一月二〇日まで東京・谷中の日本美術院で開催された第五回日本絵画協会第一回日本美術院連合絵画共進会である。[2]天心は一八九一(明治二四)年に川端玉章門下の寺崎広業や山田敬中らが中心となって組織された日本青年絵画協会の会頭となった。この会は上野の竹の台五号館を会場として定期的に展覧会活動を行った。天心は一八九五(明治二八)年に横山大観や下村観山、菱田春草らの東京美術学校系の画家を加えて日本青年絵画協会を日本絵画協会に再編し、絵画共進会を続けていた。そして日本美術院発足後も、この絵画共進会を作品発表の場としたのである。[3]

日本美術院の特質としては、岡倉天心の理想主義的美術思想という強い精神的支柱を持ち、東洋精神を基盤とした伝統主義と新しい造形を求める革新主義とが渾然一体となった芸術運動であり、作品を集めて展示するだけの展覧会組織ではない点が挙げられている。[4]そのような運動から、線ではなく色面によって描く、いわゆる朦朧体の技法も生まれた。また日本美術院のメンバーには無類の結束力があり、天心を親とする家族のようなつながりは大正期頃まで受け継がれた。この頃までは有力メンバーの大観であっても先生とは呼ばない同志的な雰囲気があったという。[5]一方で、天心が東京美術学校校長職を追われた事件は明治新政府の美術教育や制度を背景とした各種のせめぎあいが起こした政治的な性格を持ち、日本美術院で新たな国家観や歴史観を反映した歴史画が重要な位置を占めたのも、時代の文脈を体現していたからに他ならない、との指摘も忘れてはならないだろう。[6]

高い理想を掲げた日本美術院であったが、次第に運営や財政に困難が生じた。一九〇六(明治三九)年には天心の居宅のあった茨城県の五浦に横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山の四人が移り住み、日本美術院は実質的に移転・規模縮小することとなった。世間ではこれを「美術院の都落ち」と評したという。[7]しかし一九〇七(明治四〇)年に国が設置した文部省美術展覧会では、審査員二三人の中に天心、大観、観山の三名が任命され、一〇月の第一回文展では春草が二等賞、武山が三等賞を得た。[8]この時の観山の出品作《木の間の秋》や武山の《阿房劫火》などは五浦で制作され、現在、それぞれの画家の代表作と評価されている。また春草の出品作《賢首菩薩》は点描を用いることで色彩を濁らせずに明度を増す彩色方法を試み、美術界に影響を及ぼした。そして第三回文展に出品された《落葉》では装飾性の高い琳派的な彩色法が取り入れられた。[9]今村紫紅は点描法を印象派の明るい画面づくりに応用し、従来の日本画とは異なる地平を拓いた。[10]

一九一三(大正二)年に天心が五〇歳で亡くなると、日本美術院も一旦活動を停止したが、天心の一周忌にあた

る一九一四年九月二日に、谷中に新築した日本美術院研究所において開院式を行い、再興された。発起人のうち同人は大観、観山、安田靫彦、紫紅、小杉未醒の六名で、経営者兼評議員として辰沢延次郎、笹川臨風、斎藤隆三、賛助員として高田早苗、原三溪が名を連ねた。[11] そして再興記念展覧会が一〇月一五日から一一月一五日まで日本橋の三越呉服店旧館で開催された。開会に先立って決められた研究所三則は次のとおりである。

一、日本美術院ハ新日本ノ芸術樹立ニ益スル所アランガ為メニ再ビ其研究所ヲ起ス
一、日本美術院ハ芸術ノ自由研究ヲ主トス、故ニ教師ナシ、先輩アリ、教習ナシ、研究アリ
一、日本美術院ハ邦画ト洋画トヲ従来ノ区別ノ如ク分割セズ、日本彫刻ト西洋塑像ト亦然リ[12]

三つめの項目に述べられているように、再興された日本美術院には洋画や彫刻も加わった。これは大正元年に小杉未醒と大観が構想した絵画自由研究所の計画を活かした故である。三則も未醒の絵画自由研究所規則の草案から抽出された。[13] 日本美術院の洋画部門は一九二〇(大正九)年に離脱したが、彫刻部門は一九六一(昭和三六)年まで続いた。その後の日本美術院は日本画の代表的な団体として今日に至り、二〇一四(平成二六)年には再興第九九回院展を開催した。

再興第八回日本美術院展覧会[大正一〇年]出品一覧

藤井達吉が出品した日本美術院関連の展覧会は四つある。それぞれの出品一覧を目録記載順に挙げる。まず一九二一(大正一〇)年九月一日から九月二八日まで上野の竹の台陳列館で開かれた再興第八回日本美術院展覧会である。この展覧会は洋画部門の離脱後初の開催となった。八月二〇日から二五日までに受け付けられた絵画四三二点、彫塑八〇点が八月二六・二七日の鑑査を経て、一九人二三点の絵画ならびに一四人一八点の彫塑が入選した。九月一日から一五日までは日本美術院にて中原悌次郎遺作展覧会も開かれている。また九月九日の同人推挙式では、真道黎明、近藤浩一路、小茂田青樹、橋本永邦が新同人に、小山大月、黒田古郷、木下春、丹阿彌岩吉が新院友に推された。[14] 展覧会は一〇月一四日から一一月六日には京都の岡崎公園第二勧業館へ、一一月一〇日から二三日には大阪府商品陳列所に巡回している。

○日本画

同人(同人推挙順)

横山大観(茨城)《洞庭の夜》《愛宕路》《老子》《紅蓮》、下村観山(茨城)《楠公》、木村武山(茨城)《光明皇后》《羅

浮仙》、小林古径（新潟）《罌粟》、前田青邨（岐阜）《遊魚》、大智勝観（愛媛）《幽窓》、冨田溪仙（福岡）《八瀬の春》《小原［大原］の秋》、中村岳陵（静岡）《輪廻物語（歡生・修羅・夢魔・沒落・妄執・寂光）》、荒井寛方（栃木）《光輪》、山村耕花（東京）《江南七趣（西湖高莊・上海十六舗・雷峰白雲・黄浦江の雨・留園雨後・九江夕照・秦淮の夕）》、筆谷等観（北海道）《苦行より成道へ》、長野草風（東京）《岡阜濛雨》《深苑鳥語》、橋本静水（広島）《四季（春・夏・秋・冬）》、小川芋銭（東京）《山彦の谷》、北野恒富（石川）《茶茶》、速水御舟（東京）《溪泉二圖》《菊［菊花図］》、川端龍子（和歌山）《火生（日本武尊）》

一般入選（姓・名五十音順）

朝井観波（東京）《麥刈る女》、井上白楊（東京）《颱風の下に》、小川千甕（京都）《田面の雪》《青田》、落合朗風（東京）《牛》［肥牛］、小茂田青樹（埼玉）《出雲江角港》、加藤淘綾（神奈川）《呪縛されたる魔神》、木下春（福島）《桃》、黒田古郷（東京）《葡萄》、郷倉千靭（富山）《地上の春》、小林柯白（大阪）《道頓堀の夜》、小山大月（東京）《桃春》、近藤浩一路（山梨）《十二橋》《八郎潟》《蓮分舟》《夏山路》、酒井三良（福島）《災神を焼く殘雪の夜》、田口黄葵（東京）《冬眠》、丹阿彌岩吉（東京）《百日紅》、富取風堂（東京）《北國の冬》、橋本永邦（東京）《水郷の夏》、藤井達吉（愛知）《山芍薬》、四田観水（愛媛）《高原の夕》

○彫塑

同人（同人推挙順）

平櫛田中（岡山）《降魔》、吉田白嶺（東京）《散華》、藤井浩佑（東京）《鏡に向て》《浴》《座せる女》、下村清時（和歌山）《太子像》

一般入選（姓・名五十音順）

荒川友山（鳥取）《李下》、石戸谷剛（青森）《時劫》、川上邦世（東京）《孔子像》《種牛》《妙音》《虎》、喜多武四郎（東京）《K君の肖像》、木村五郎（東京）《簸の川上に於ける素盞雄命》《習作》、杉本宗一（静岡）《習作》、鈴木文造（宮城）《エスキース》、武井直也（長野）《O婦人》、田中正太郎（東京）《肖像》、寺瀬黙山（長野）《鏡裏》、長谷川亮《少女の顔》、堀義二（山口）《鏡を持つ少女》、松原岳南（奈良）《うたの終り》、山本豊市（豊一）（東京）《胴》[15]

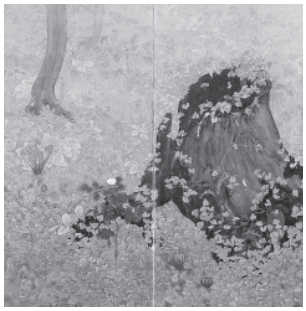

fig.1　藤井達吉《山芍薬》大正10年
岡崎市美術館蔵

藤井達吉の《山芍薬》(fig.1)については、小宮豊隆と津田青楓による評がある。小宮は「山芍薬に特に強調しないで外の草木をも一杯に描いて了つた所が面白い。全體の色の調子も心持が好い。唯眞ん中の岩の様なものと其上に這上がつてゐる草とが、何となく拵へものめいて映つて來るのは何うした事か。材料がごた〳〵多すぎると云つて非難した者もある様だが、私は丸で其反對を考へる。是は此儘で立派な高價な織物の模様である」と書いた。[16]

そして津田は「全體にいぢけたやうな感がする。色からくる全體の感覺に重きを置き過ぎたせいか、何となく元氣が乏しい。矢張り氏の工藝の製作が矢張り刀の切れ工合重きを置かなければならないやうに筆觸に重きを置くこともこの種の畫には最も必要な條件と思ふ。色彩には可成り苦心がしてあるように見受ける。そして氏らしい一種澁味のある調子が全體を支配してゐる」とした。[17]なお吉川霊華は今の日本美術院にはふたつの潮流があり、ひとつは古典的基調の上に何物かを求め、もうひとつは洋画的基調に立って精緻な写生に自然の再現を企てると指摘した。[18]他の評でも、当時の日本画全般に適用できる新傾向として、写実的立場に立って対象の真を捉えようとする自然主義的運動に言及しているものがある。[19]藤井の作品もこの自然主義に分類されると思われるが、小宮の指摘するとおり、自然観察から出発しながらも装飾性が強く出た表現である。

第八回日本美術院試作展覧会出品一覧

藤井は一九二二(大正一一)年三月二〇日から四月三日まで日本橋の三越呉服店で開催された第八回日本美術院試作展覧会にも入選した。入選総数は絵画五六点、彫塑一八点であった。[20]この展覧会は四月七日から一五日には京都市公会堂へ、四月二六日から三〇日には新潟県商品陳列所に巡回した。主な出品作品は次のとおりである。

○絵画

入選作品

青木しづ《草花》、東克己《僧院の夕》、荒井紫雨《野聖桃水》、井上白楊《人魚》、茨木杉風(芳太郎)《親を待つ子供等》、大塚晃峻《暁》、小川千甕《井》、荻野巒山《秋》、奥村藻山《向陽鳥》、奥村命兒《トマト》、小倉(溝上)遊亀《靜物》、堅山南風《白梅》、加藤淘綾《栗》、郷倉千靭《雑草の秋》(院賞)、《霜枯の徑》、小林柯白《陽春》、坂慶山《乙姫》、酒井三良《初霜》(院賞)、白山春邦《荒圃》、杉本真随《日宮殿の后》、鈴木けん子《春日》、関谷善信《山茶花》、高橋印波《柘榴》、田中青坪(文雄)《早春》、西村青帰《山の夕》《赤門》、野原慶子《菊》、平野源作《冬の芦の湖》《晩秋の朝》、藤井達吉《尾花の巻》、藤井白映《夏日》、保尊霊水《晩秋》、松平春樹《丘》《早春の丘》、村井秀啓《水仙》、山中神風《南天》、和田東明《梅》

同人出品

荒井寛方《魔利支天》《鶴》、小川芋銭《朧夜》、小茂田青樹《灘小屋》、川端龍子《早春》、北野恒富《大原女》、木村武山《慈母観音》《雪中の雉子》、下村観山《迷悟》、真道黎明《五顆之柘榴》、冨田溪仙《西行櫻》、長野草風《さゝ

げ》、橋本永邦《春》、山村耕花《春駒（菊之丞・富三郎）》、横山大観《朝霧》

○彫塑

入選作品

大橋敏男《子守》、喜多武四郎《習作》、木村五郎《女兒歩行》、杉本宗一《女》、鈴木文造《習作》、田中正太郎《自像》、寺瀬黙山《古武士》（院賞）、中島武《肖像》（院賞）、中村米蔵《習作》、古屋源雄《農家の女》、山本豊市（豊一）《女》

同人出品

石井鶴三《雪國の女》、戸張孤雁《トルソー》、平櫛田中《制作》、藤井浩祐《猫》、吉田白嶺《説法》[21]

藤井の出品作《尾花の巻》について、石川帛水が「藤井達吉氏の『尾花の巻』は瀟洒愛すべきもの、筆致も輕妙を極めてゐる」と評している。[22]平澤大暲は本展で日本美術院が従来より程度を上げ、院外の作家を採用したことなどの春の試作展充実の努力を多としながらも、重きをなすのが同人の作で「一般入選には際立って優れたものがなく、人無しの嘆に堪へない」と辛口である。[23]そして草土社の悪影響などの時代の流れが及んでいると書き、速水御舟や小茂田青樹の影響でいわゆる細線描写が非常に増えたことを批判している。

再興第九回日本美術院展覧会［大正一一年］出品一覧

藤井が三回目に出品した展覧会は一九二二（大正一一）年九月五日から九月二九日まで竹の台陳列館で行われた再興第九回日本美術院展覧会である。八月二五日から二八日までに受け付けられた作品は絵画三三一点、彫塑八九点だった。そのうち入選したのは絵画が二〇人二八点、彫塑が一四人一四点であった。岡崎公園第二勧業館での京都展は一〇月一三日から一一月五日まで、大阪府商品陳列所での大阪展は一一月九日から一九日まで開催された。[24]

○日本画

同人（同人推挙順）

横山大観（茨城）《夜》、下村観山（和歌山）《天心先生》《俊徳丸》、木村武山（茨城）《迦楼羅王》、安田靫彦（東京）《二少女》、大智勝観（愛媛）《雨季四題（白映・夕映・早映）》、冨田溪仙（福岡）《漁火》《岬》、中村岳陵（静岡）《緑

蔭嬉遊圖》、荒井寛方（栃木）《樂土》、山村耕花（東京）《壺三ツ（其一・其二・其三）》、長野草風（東京）《雙鶴》、橋本静水（広島）《豊公（其一・其二・其三）》、小川芋銭（東京）《沼地四（檜原・鱒取り・小鰕漁・家鴨小屋）》［沼四題］、速水御舟（東京）《廣庭立夏》、川端龍子（和歌山）《つのづきの卷（越後二十村行事）》《庭上印象（春・夏・秋・冬）》、真道黎明（熊本）《柘榴》、近藤浩一路（山梨）《番小屋》《案山子》、小茂田青樹（埼玉）《母子の雀》《ポンポンダリヤ》、橋本永邦（東京）《邯鄲》

一般入選（姓・名五十音順）

石山太柏（山形）《梅咲く吉野村》、茨木杉風（芳太郎）（滋賀）《八木節》、牛田鶏村（神奈川）《はこねの山》、大塚烏月（富山）《稱名峽》、大林千萬樹（岡山）《紅粧》、小川千甕（京都）《朝明の霞》《曙畔》《暮春の日》《おぼろ夜》、帰山阡蒼（千蒼）（新潟）《花柘榴》、堅山南風（熊本）《桃》《柘榴》、郷倉千靭（富山）《村童三題（竹馬・縄飛・凧上げ）》《西瓜畑》、小林柯白（大阪）《山》、斎藤龍江（東京）《草原の夏》、酒井三良（福島）《春耕》《温泉》、高橋印波《深翠》、富取風堂（東京）《芍藥》、橋本秀洞（栃木）《燻製の鮭と鰊》、藤井達吉（愛知）《櫻》、保尊霊水（長野）《石灰焼》、松尾晃華（福岡）《暮沼》、山中神風（熊本）《後庭にて》、和田東明（新潟）《梅》

○彫塑

同人（同人推挙順）

平櫛田中（岡山）《聖典》＊大阪展のみ出品、佐藤朝山（福島）《木花咲耶姫》、藤井浩佑（東京）《春》《水浴》《萠え出る蕨》《浴泉》、石井鶴三（東京）《相撲》

一般入選（姓・名五十音順）

浅野孟府（東京）《頭》、石戸谷剛（青森）《睡蓮》、神田古畔《白蓮》、杵谷精一（鳥取）《首》、木村五郎（東京）《習作》、斎藤瑞峻《驀然打發》、杉本宗一（静岡）《青春》、武井直也（長野）《大村氏の像》、中島武（東京）《女》、中村米蔵《男のトルソー》、橋本平八（三重）《猫》、アルフェオ・ファッギ（イタリア）《詩人野口米次郎の顔》、松原岳南（奈良）《豆糟運び》、山本豊市（豊一）（東京）《男の首》

藤井の出品作《櫻》（fig. 2）を、小宮豊隆は次のように評した。「藤井達吉君の「櫻」は面白い。外に豊太閤か何かをかいた屏風だつたかに櫻の花をかいてあつたがあの櫻と此の「櫻」とは比べものにならない。あの櫻は型の櫻をかいたものである。此「櫻」は生きた櫻をかいたものである。此「櫻」には櫻の花びらの持つてゐる光りまでがかいてある。さうして其光りのニユアンスを加減する事によつて、描かれた櫻の花全体に立体的なイリユージョンが興へられてゐる。左の端に配置された檜か何かの若木も可い。さうして全体の色調に燻しがかけてあるから、派手

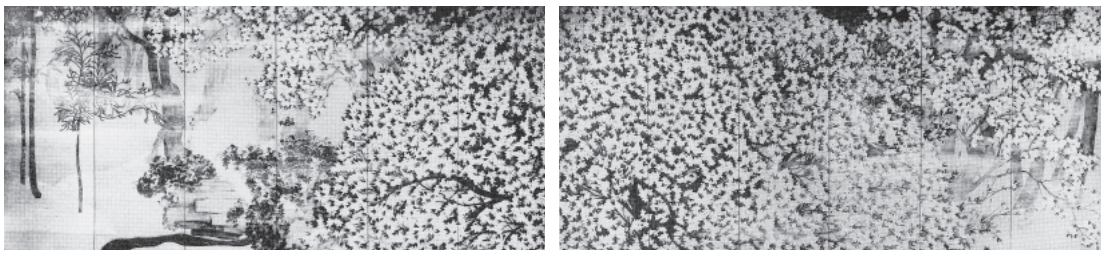

fig.2 藤井達吉《櫻》『日本美術院百年史 五巻』p. 474

な櫻が、浮わ浮わせずに、落ついて人に訴へて來る――たゞ不滿なのは左下の岩と水との様式並びに其配合一般である。あゝいふ櫻をかいてゐながら、なぜかういふ岩とかういふ水とのかき方をするのか、一般的に云つて岩と水とを此所に配合する必要が何所にあるのか。これは畫面全体から云へば重要な役目を勤めてゐるものではないが、重要な役目を勤めてゐるものでない丈に私には氣になる。藤井君に限らず一般の模様畫家は、何がなしに何もない空間に堪え得ないといふやうな傾向があるのではないか。何もない空間の持ち得る味といふものに就いて、模様畫家は研究も利用も足りないといふやうな事がありはしないか[25]」小宮は画面を埋め尽くすように描いている点を取り上げ、藤井を模様画家と呼んでいるが、これは彼が藤井をまず工芸家として認識していたことを示している。なお『中外商業新報』記者は展覧会全体について展示室ごとに言及する中で、「第六室　に入ると川端龍子氏の「庭上印象」四題がドレも面白い、藤井達吉氏の「櫻」は六曲一双の大作で屏風一面に山櫻を描いてある、又新入選者橋本秀洞氏の「燻製の鮭と鰊」は實物を見るやうだ、總じて同人の他に追随を許さぬ大家振りも流石と思はせるけれどそれは骨格のやうなもので新入選者の溌剌たる作品が美術院としての血であり肉であることが泌々と感じられる[26]」と書いた。《櫻》は現在では失われてしまったが、その下絵とされる二曲一隻屏風《桜図》(fig. 3)が愛知県美術館に所蔵されている[27]。

下村観山が《天心先生》を出品した再興第九回院展は創立二五周年に当たっており、展覧会の総評でもそれを意識して創立者岡倉天心の重要性や大観・観山のリーダーシップないし革新性に言及しているものが少なくない[28]。川路柳紅は、美術院の理想が写実美や現実感より理想美、超越感にあり、それが天心の理想主義に胚胎すると指摘し、それが一般の人々の生活感情から遠い点を問題視している[29]。また坂井犀水は院展が官設の帝展に比べて自由度が高い上、戦略として帝展に対して挑戦的態度を取ることによって人々の気持ちをつかみ、精選主義の緊張感もあいまって今日の隆盛につなげた、と分析した[30]。そして藤懸静也は新しい傾向として細密な写実主義の流行を速水御舟や富取風堂の名を挙げながら指摘し、行き過ぎた写実主義に陥るかもしれないと危惧した。第八回試作展覧会の評と同様、速水御舟の描写法が、好悪の別はともあれ、相当注目されていたことを裏付ける。

第九回日本美術院試作展覧会出品一覧

最後に藤井が出品した日本美術院の展覧会は一九二三(大正一二)年三月一五日から二八日まで竹の台陳列館で開かれた第九回日本美術院試作展覧会である。入選点数は絵画一〇八点、彫塑九点で[31]、四月一日から一五日には京都の第一勧業館で展観された。

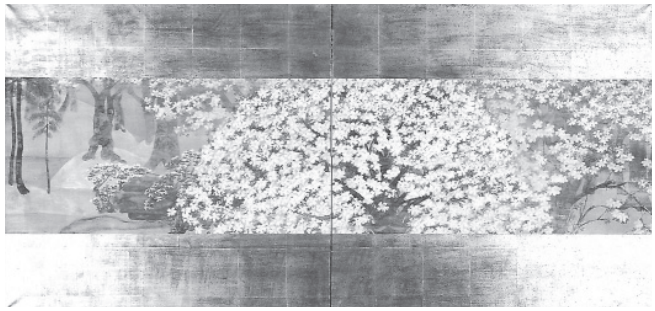

fig.3 藤井達吉《桜図屏風》大正11年頃　愛知県美術館蔵

○絵画

入選作品

相原大叡《春近し》《淺春》、相山清三郎《鳥》、秋元節郎《風景》、跡部白烏《早春の海》《冬の竹藪》、安西正男《鯖》、安西嬉男《代々木》、生田花朝《聽聞》、伊坂朝雄《蕪菁菜》、石塚翰《梅》、井上白楊《牛》、茨木杉風（芳太郎）《玉乗り》、岩岡とも枝《猫》、鴛海旺《湖村の朝》、大塚晃峻《斑鳩村》、小川千甕《鳥》、奥村土牛《柿》、奥村玲瓏《猫》、小倉（溝上）遊亀《菊》、小合友之助《店》、尾内仲次《早春の河原》、小野竹桃《丘の家》、帰山阡蒼（千蒼）《椿》、堅山南風《金鱗》《雲雀》、加藤淘綾《蜜紺》、加納静志《綾子》、川邊菊久（菊次郎）《紫蕚》、梯千原《草叢》、北野以悦《異國》、久保光栄《菊》、黒田古郷《叭々鳥》、郷倉千靭《野鼠》（院賞）《雛》、幸田邦次郎《婦人》、小猿雪堂《夜の梅》《小夜の中山》、小島米舟《山茶花》、児玉素行《沼畔夜雪》、小寺芳子《椿》、小林柯白《高圓山》《二上山》《三輪山》、小山大月《枯薄》、坂慶山《壺の花》、酒井三良《殘照》《春はきつれど》、佐々木九閑《雨》、佐々木蕉月《椿》、佐藤虹羊《黄昏》、杉本眞随《廢寺》、鈴木麻古等《夕陽》、鈴木厲子《郊外冬景》、関谷善信《青木》《初秋》、高島雲峰《或る友人の家》、高橋印波《辨天堂》《八手》、高橋聖華《山梔》、高橋萬年《雨》、高橋蘆山《冬の朝》、高増啓蔵《山鳩》、多胡白峰《早春》、田中青坪（文雄）《少女》（院賞）、田中湛水（松平）《秋庭》、鶴田吾郎《春光照影》、東郷瞳曄《柘榴》、中曾根波兒芽（一）《月は落ちて行く》、中村清貞《仙女》（院賞）、中村泰山《新高雄の秋》、名取光珠《柿》、奈良虚白《静物》、野生司香雪《秋刀魚》、野田文雄《少女》、橋本秀洞《猫》、橋本秀邦《空也上人》、針間とめ子《蜜柑》、平林大虚《雪ふる日》《茄子畑》、福田豊白《はなびらのかげ》、藤井達吉《吉野の奥》、藤井白映《少女》《田舎》、藤田圭之助《兎》、古川素水《曇り日》、古荘肇成《鳩》、別役月乃《爪》、星加雪乃《茄子》、保尊霊水《開墾地》、堀内廣堂《牛車》、本郷越嶺《川開》、松尾晃華《國分村の秋》、松尾潮幹《寒空》、松坂春久《花鳥》、松澤來居《遊里》、松平春樹《早春の伊豆》、松永正路《近郊小景》、松久休光《コーチン》、宮田隆子《ほほづき》、村井秀啓《冬の丘》、村上次郎《微風》、森田才一《蟹》、山崎歌子《ダリヤ》、吉川朝衣《蜀黍》、四田観水《雨後の夕》《殘雪》、和田東明《菊》

同人出品

大智勝観《曉山の雪》、小川芋銭《白雲想》、川端龍子《ばせを翁》、木村武山《鷹》、近藤浩一路《凍池》、下村観山《獨釣》、真道黎明《葡萄》、冨田渓仙《春色》、長野草風《艶》、中村岳陵《七面鳥》、橋本永邦《餌奪ひ》、橋本静水《鯛》、横山大観《茶梅》《雨》

○彫塑

入選作品

厚見天珉《水温む》、石戸谷剛《樹下》、牛島志智郎《私の顔》、大橋敏男《疲れの後》、木村五郎《少女曲藝》、杉本宗一《坐せる女》、武井直也《女と其の影のエスキース》、土井要輔《習作》、中平四郎《春の海》

同人出品

石井鶴三《春》《小兒》、平櫛田中《鬼の腕相撲》、藤井浩祐《鰌すくい》《裸》《小憩》[32]

『美術之日本』記者は、細微な線を用いた純写生式の諸作品、また酒井三良を代表とする一種の漫画味を帯びた作風、そして油彩や水彩の構図・色彩を取り入れたものをいわゆる院展風の作品の他に見出している。彼は「小猿雪堂君の『夜の梅』や藤井達吉君の『吉野の奥』など、墨色に豊かな味を見せた作品が若干あった」と藤井作品にも言及した。[33]

藤井達吉の院展出品停止理由と今後の課題

藤井達吉の日本美術院への出品は上記の展覧会で終わった。藤井が日本美術院へ出品を始め、そしてやめた理由については当館館長が次の諸点を推測している。まず出品理由として、帝展への工芸部門の設置を求めて運動をしている関係上、帝展へ出品することを見合わせた可能性があり、同時に一九一八(大正七)年頃の藤井は自身への誹謗中傷により工芸界のあり方に嫌気がさしていた。加えて芸術の理想を本阿弥光悦に求め、伝統的な絵画への挑戦を行った。さらに再興した日本美術院には大正期の個性尊重の精神が見出され、その精神にも共感して野心作《日光》三部作を出品したものの落選し、自尊心を傷つけられたのかもしれないと指摘している。[34]

藤井作品の入選に関しては、日本美術院の主要メンバーと藤井との人的つながりも探る必要があるだろう。再興院展の賛助員に名が挙がっている原三溪の娘婿、西郷健雄は藤井作品のコレクターだった。

また、これまで当館では先行研究に基づき、藤井が再興第八回日本美術院展覧会出品後に院友に推されたと年譜などに記述してきたが、少なくとも『日本美術院百年史』にはそれを裏付ける記載が見当たらない。藤井が院友であったとする見解は、一九七四(昭和四九)年に出版された山田光春の『藤井達吉の生涯』、さらに同書に引用がある石原明の言が源となっていると思われる。[35]山田は小原村(現・愛知県豊田市)に生まれ、東京美術学校を卒業した画家、石原は愛知県海部郡出身の歌人である。山田は「山芍薬」の入選によって、日本美術院と関係を持った達吉は、その後出品をつづけて院友に推されるまでになった」と書き、石原の記述を「藤井先生を悼む」『博物』昭39・10」と引用元を添えて引いた。これは博物短歌会から発行された『博物:短歌雑誌』二九巻一〇号を指す。[36]「日本美術

院に屢々入選して、早く院友に推薦されていた。（中略）しかし孤高の氏は、美術院の中のどの系統にも属していなくて、折角努力したものが落選の憂目に会われていた。あまりに落選が続くので、何のための院友推薦かと人ごとながら憤慨して（後略）」石原は《日光》三部作が落選した旨にも触れている。また彼は、藤井が一九六四（昭和三九）年に没した翌年に当時愛知県副知事であった松尾信資によって編まれた『孤高の芸術家藤井達吉翁』にも同内容の一文を寄せている。[37] 石原の記述は一度のみならず何度も落選したようにも読める。石原が藤井と交流していたことは確かである。しかし藤井が院友だったことを示す別の文献も探索しなければならない。また展覧会企画を立ち上げるには、藤井と同時期に出品した他の作家の作品傾向を分析し、当時の日本美術院の特徴を作品群から語れるようにする作業が必須となるだろう。

（註）

1 細野正信「第二章　前期日本美術院」日本美術院百年史編集室企画・編集『日本美術院百年史　二巻　上『図版篇』』財団法人日本美術院　一九九〇年　三八六頁。

参考：日本美術院創設の趣旨

本邦美術の大勢は、明治の風雲に際會して、一旦破壊的變動を受けたりと雖も、其氣運漸く熟するに及んでや、尋で保存的方向に復歸し、纔かに幕末以來の命脉を維持するを得たり。然りと雖も宿昔僭勢力の鬱積する所、遂に進歩發達の時機を催進し來りて、今や多少の波瀾を認むるに到れり。若し夫れ彼岸の着點如何に至っては、他年風波靜穩なるの時、是非はじめて定らんのみ。

惟ふに本邦の美術は、頗る高古に淵源せりと雖も、其前途尚ほ甚だ遼遠なり。今日以性一進一歩以て大成の域に到達するは、豈容易の業ならんや。夫れ美術の方針は固より僱倚すべからず、苟も僱倚すれば、即ち其大成の域に遠からんことを恐る、又美術の研究は固より羈束す可らず、苟も羈束すれば、即ち其發達進歩に障礙あらんことを恐る。是れ今日既に業に、美術及び諸工藝に關する所の協會學校工場等の都鄙各地に存在するに拘らず、更に進んで同志を會合し、茲に日本美術院を創設するの已むべからざる所なり。

抑も本院の事業たるや、繪畫彫刻を首とし、建築裝飾より以て彫金鍛金鑄金漆工窯工刺繍寫眞彫版等、諸般の美術工藝に關する圖案、及び其實技を包有し、而して之が施設の大要は、研究部、製作部、展覽部の鼎立を期し、先づ研究及び製作の二部を設立して本院の基礎を定め、漸次其他に及ばんとす。蓋し研究部は美術の根底を培養するの田園にして、製作部は會員の實技を練磨せしむか爲に、内外の依囑に應じて花實を競ふ所の藝苑なり。而して展覽部に於ては別に本院の成績品及び古今の參考品を蒐集し、一は以て技藝家の鑑評に供し、一は以て鑑賞家の好尚に對ふる所たらんとす。

夫れ美術及び美術工藝の研究は、實習に基くに非ざるよりは、其効果を覩る能はず、而して之が研究の方法たるや、毫も他より檢束する所なく、本邦美術の特性を經とし、各自作家の特長を緯として、專ら其發達應用の自在を得せしめざるべからず。是を以て本院は、今日以往將に執るべきの方針を定め、明治美術の木鐸を以て自ら任じ、内は會員の爲に技倆を揮ひ、以て其所信を實行し兼て國家利用厚生の一端に供せんと欲す。

以上計畫する所の規模は、之を美術本來の面目に照せば、固より其不完不備を免れざるべしと雖も、今日自ら微力を顧みず、聊か同志を團結して、之が實行を企圖する所以は、宿昔の覺悟上衷心實に已み難きものあればなり。大方の諸君子、請ふ、幸に微衷の存する所を諒察し、本院の基礎をして永遠に鞏固ならしめ、其事業の前途をして、愈よ進歩發達せしむるに賛同あらんことを。

（『日本美術』一号　明治三一年一〇月）

2 前掲論文（1）三九〇頁。

3 古田亮「院展の芸術、その戦前までの軌跡」「日本美術院創立一〇〇周年記念特別展　近代日本美術の軌跡」図録　東京国立博物館・財団法人日本美術院　一九九八年　五頁。

4　前掲論文(3)四頁。
5　同上。
6　佐藤道信「美術教育の展開③東京美術学校と岡倉天心」「明治の日本画①狩野芳崖と横山大観」『日本美術館』小学館　一九九七年　八八六・八八七頁、九一二・九一三頁。
7　藤本陽子「日本美術院の五浦時代」『日本美術院百年史　三巻　上[図版編]』財団法人日本美術院　一九九二年　四五六・四七二頁。
8　同上。
9　前掲論文(3)七・八頁。
10　同上。
11　細野正信「第四章　新芸術の樹立へ」『日本美術院百年史　四巻』財団法人日本美術院　一九九四年　三四三・三八一頁。
12　同上。
13　同上。
14　「年表」『日本美術院百年史　五巻』財団法人日本美術院　一九九五年　九七〇・九七一頁。
15　前掲書(14)四〇四・四〇五頁(「再興第八回日本美術院展覧会[大正一〇年]出品目録)。
16　前掲書(14)四三五・四三六頁(小宮豊隆『東京日日新聞』大正一〇年九月一六日)。
17　前掲書(14)四三六頁(津田青楓『中央美術』七巻一〇号　大正一〇年一〇月)。
18　前掲書(14)四〇八頁(吉川霊華「院展瞥見」『国民新聞』大正一〇年九月八日・一一日に三回連載)。
19　前掲書(14)四〇九頁(林田[春潮]生「今年の美術院」『都新聞』大正一〇年九月一二日・一七日に三回連載)。
20　前掲年表(14)九七二頁。
21　前掲書(14)八三六・八三七頁。
22　前掲書(14)八三七頁(石川帛水(宰三郎)「美(術)院の試作展覧會」『やまと新聞』大正一一年四月二日)。
23　前掲書(14)八三七・八三八頁(平澤大暲「日本美術院試作展覧會を観る」『中央美術』八巻五号　大正一一年五月)。
24　前掲年表(14)九七三・九七四頁。
25　前掲書(14)四七四・四七五頁(小宮豊隆『読売新聞』大正一一年九月一八日)。
26　前掲書(14)四四頁(一記者「美術院お先へ見物誌」『中外商業新報』大正一一年九月五日)。
27　土生和彦「作品解説」『画家としての藤井達吉』図録　碧南市藤井達吉現代美術館　二〇〇九年　四一頁(《桜図》は紙に着色、78.5×168.0cm)。
28　前掲書(14)四四七・四五〇頁(春山武松「第九回院展評」『大阪朝日新聞』大正一一年九月九日、獅琦庵[藤懸靜也]「日本美術院の二十五年記念展覧會」『国華』三三編第四冊　大正一一年一〇月)。
29　前掲書(14)四四八・四四九頁(川路柳紅「院展を観る」『東京日日新聞』大正一一年九月一二日)。
30　前掲書(14)四四七頁(坂井犀水「院展の繪畫」『やまと新聞』大正一一年九月七日)。
31　前掲年表(14)九七五頁。
32　前掲書(14)八三九・八四〇頁。
33　前掲書(14)八四〇・八四一頁(一記者「日本美術院試作展」『美術之日本』一五巻三号　大正一二年三月)。
34　木本文平「画家としての藤井達吉」「画家としての藤井達吉―創作の原点を求めて―」図録　碧南市藤井達吉現代美術館　二〇〇九年　一一・一二頁。
35　山田光春『藤井達吉の生涯』一九七四年　七一・七三頁。
36　国立国会図書館デジタルコレクションより。
37　石原明「藤井達吉先生を悼む」松尾信資編『孤高の芸術家藤井達吉翁』愛知県総合芸術研究会　一九六五年　一五〇・一七七頁。

＊本稿では展覧会出品一覧や「日本美術院創設の趣旨」の引用にあたり、当時の記述を尊重して用いられている字に忠実に従うよう心がけた。しかし活字の得られない一部の漢字については現在の漢字を使った。